

表現する 存在感を 自然物の

【特集】

身近にある石も、さまざまな感覚を通して感じ取ってみると、その存在感を再発見できる。石の来歴や表情・性格に思いをはせながら、粘土や絵の具を使って石の形・色を表現する、宣昌大先生の授業を取材した。

撮影 伊東俊介

授業レポート

ようこそ、「石先輩」

大阪府摂津市立第三中学校

宣昌大^{そん ちゃん}先生 × 1年生 (2組・3組 各32名)

宣先生の授業は、生徒を引き付ける仕掛けにあふれている。今回の授業も、そう。本題材は、身近な石をさまざまな感覚を通して捉え、その特徴を自分なりに表現するという内容だが、先生は石に愛着を持ってもらうために、「石先輩」と呼ぶのだ。さて、生徒はどのように石に思いをはせ、形や色を表現するのだろうか。



先生が自ら拾ってきたという約200個の石の中から、形や色が気に入ったものを選ぶ。

第1時

「石先輩」に触れる

カチ、カチ――。

始業のチャイムが鳴り終わるのを待って、先生は手に持った石をぶつけて音を鳴らした。「今回のテーマはこれ。何の変哲もない石です」と切り出し、生徒たちに「触ってみて」と差し出した。生徒からは、「丸みがある」「つるつる」「冷たい」とさまざまな感想が出る。

「この石は、福井県の海岸で拾ったものです。では、質問。この石は最初からこの状態で海岸にあったと思う？」。先生が問いかけると、生徒たちは首を横に振り、「山から流れてきた」と一人がつぶやいた。

「そうだね。もともと山にあった大きな岩が、川に流されて小粒な石となり、海にたどり着いた。もっと言うと、山にあった大きな岩も、も



匂いを嗅いだり、指先で触れてみたりして、「石先輩」を感じ取ろうとする生徒たち。



「自分だけの石先輩を見つけて、理解を深めましょう」と話す宣先生。

もとはマグマが固まってできた溶岩石だったりするかもしれない。そう考えると、この石は、私たちの何百倍も何千倍も長生きして、この形になった大先輩といえます」。

ここで、スクリーンに「ようこそ石先輩」という授業テーマが映し出された。「先輩のそういった来歴を知ると、軽々しく投げたりなんかできないよね」と笑いを誘いつつ、今回の授業では、粘土や絵の具を使い、石の形や色を表現することを告げた。「制作を通して、身近な自然物がもつ存在感を再発見してもらえたらと思います」。

続いて先生は、自身で拾ってきたという約200個の石を披露。「今日は自分だけの石先輩を見つけて、理解を深めましょう。この中から一つずつ石を選んでください」。生徒は石の入ったケースに集まり、手に取りながら、お気に入りの石を選んだ。

そして、選んだ石の特徴を捉えるために、形や色のほか、想像できる性格などをワークシートに書き込んでいく。「目で見ただけでなく、指先で触ったり、耳に近づけて音を聞いてみたり、匂いを嗅いでみたりしましょう」。先生はそう呼びかけ、生徒たちは石先輩をさまざまな感覚で感じ取ってみる。

ひと通り記入を終えたら、石の特徴をグループで発表。「形は丸みがあって、表面はつるつる。色は白っぽくて、茶色と黒も交じっています。

性格は優しい」「四角い形だけど、ところどころで丸みもあります。優しさも兼ね備えているイケメンって感じ」などと盛り上がる。

先生は机間指導しながら、生徒たちに質問を投げかけた。

先生「優しいっていうのは、どこを見てそう思ったの？」

生徒「うーん、丸いところ」

先生「じゃあ、イケメンってところは？」

生徒「とがっているところ、かな」

先生「なるほど。丸い部分には優しさを感じて、とがっている部分には格好よさを感じるわけだね」

名前をつけている生徒もあり、とても楽しそう。発表後は、グループ内でそれぞれの石について意見交換し、さらにワークシートに特徴を書き加えていった。

第2・3時

「指で見て」形をつくる

「前回の授業で石先輩と運命の出会いをしたよね。今日は石先輩の形をつくっていきます」と先生。

作品制作ではまず、成形からスタートする。濡らした新聞紙を絞って芯材とし、その上から粘土を貼り付けていくという流れだ。

この工程で先生が重視したのは、

「指で見る」こと。「石先輩を触ってから、自分の作品を触ってみてください。質感の違いがわかるはず。指というのはすごく敏感で、例えば、1本の髪の毛を上からなぞると、下からなぞると、微妙な触り心地の違いを感じ取ることができる。目で見てわからない細かな違いも、指で触ることでわかります」と話し、触って確かめることの大切さを呼び掛けた。



「石先輩」と作品を並べて、じっくり観察したり、指先で触れたりしながら違いを感じ取る。



へら、ブラシ、ローラー、スポンジなど、成形や着色に使えるような道具を自由に選んで使う。

生徒たちは、水を張った筆洗に新聞紙を浸し、ギュッと固く絞ってから、その上に粘土を境目のないよう貼り付けていく。石と作品を横に並べて、さまざまな角度から凝視して形を比べたり、指先で触れたりして、形を整える。第1時では和気あいあいと「先輩」の紹介をしていた生徒たちも、制作に入ると、表情は真剣そのものだ。

美術室には、粘土を加工するためのさまざまな道具が用意されており、「使えるものは無限大」と先生。生徒たちは表面の凹凸やごつごつした質感を表現するために、綿棒やようじ、へら、ブラシなどのさまざまな道具を使っていた。形を大きくしすぎてしまった生徒には、「少しダイエットしよう」と先生がアドバイス。粘土をへらで切り取り、一回り小さく形を整えていた。

第4～7時

重ね塗りを繰り返す

いよいよ着色に入る。

冒頭で、先生が「お役立ちアイテム」として紹介したのは、「ようこそ、石先輩」の前に取り組んだ「色の魔法陣」という題材。この題材は、生徒にさまざまな混色を試させ、一人一人が星型の色相環をつくるというものだが、その取り組みが、今回の題材の布石にもなっている。

また、生徒が使う絵の具セットに

も、独自の工夫がある。先生が必要と感じる12色がセットされており、あえて茶色の絵の具は抜いてあるのだ。茶色があると、土でも木の幹でも、それで済ませてしまう生徒が多いからだという。

『色の魔法陣』を参考にしながら、水で薄めた絵の具を塗り重ね、塗ったら乾かすを繰り返します。色の力で、石先輩の『石人生』の重みを表現してみましょう。白っぽいところは濡らした筆でこすると、絵の具がはげて白っぽくなります。白を塗る前に試してみてください」。

先生がそう告げると、生徒たちはさまざまな色の絵の具をパレットに出し、「色の魔法陣」を参考にしながら、色を混ぜ始めた。「うーん、全然思い通りの色にならない」「もうちょっと黒を足してみよう」などとおぼやきながら、紙に試し塗りをし、「石先輩」の色に近づけようと試行錯誤している。

O君(上写真1)は、石らしい色むらを表現するために、混色した絵の具を筆ではなく指先につけて、なじませるように色を塗っていた。



1/O君は、混色した絵の具を指先につけて、なじませるように色を塗っていた。



2/木の板をこすりつけて、表面の細かい凹凸を表現するOさん。

道具の使い方も、それぞれ工夫を凝らしている。Oさん(上写真2:作品はp10参照)は、表面の細かい凹凸を表現するために、ブラシをトントンと叩きつけたり、木の板をこすりつけてザラザラした質感を出したりと、自分なりの工夫で「石人生」を表現していた。

次時では、完成した作品の「記念撮影」を行う。



上/「色の魔法陣」を示しながら、生徒に混色についてアドバイスする先生。右/本題材の前に取り組んだ「色の魔法陣」。「魔法陣」という表現は、生徒が発案したという。



授業展開 生徒の活動(全9時間)

第1時:導入

- 石の形や色などを、さまざまな感覚を通して感じ取る。
- 自分が選んだ石の来歴や性格を想像し、その特徴をグループ内で交流する。



第2～7時:制作

- 指で触るなどして石の質感を感じ取り、道具の使い方を工夫しながら、石の形を表現する。
- 重ね塗りや混色を工夫しながら、石の色を表現する。



第8・9時:撮影・鑑賞

- 自分の作品をタブレット端末で撮影し、見方を広げる。
- 友達作品を鑑賞して、そのよさを味わう。

指導計画

準備するもの	生徒 筆記用具、アクリル絵の具 教師 石(こぶしくらいの大きさ)、軽量紙粘土、新聞紙、へら、ブラシ、ローラー、カッター、スポンジ、ようじ、綿棒、タブレット端末
学習目標	●身近な自然物の存在感を再発見することができる。 ●自然のもつ複雑さや奥深さを、形や色で表現することができる。
評価規準	●石の特徴からその性格を考える活動を通して、自然物の造形的なよさや美しさなどを感じ取ろうとしている。(美術への関心・意欲・態度) ●視覚や触覚などの感覚で捉えた石の特徴や感じ取った性格をもとに、いかに表現するか構想を練ろうとしている。(発想や構想の能力) ●凹みやとがった角などの形の特徴について、材料や用具の使い方を考え、工夫してあらわそうとしている。(創造的な技能) ●色の特徴について、混色や塗り方、用具の使い方を考え、工夫してあらわそうとしている。(創造的な技能) ●形や手触り、色などから対象の特徴や性格について交流し、自分の見方や感じ方を広げようとしている。(鑑賞の能力)



第8・9時

最高の1枚を残す

「今日は作品を撮影して、石の存在感を示す最高の1枚を残そう」。先生はそう投げかけ、グループごとにタブレット端末を配布した。

生徒たちは、作品とタブレット端末を手に、外へ。木の根元に作品を置いてみたり、切り株の上に作品を載せてみたりと、撮影のしかたはさまざま。「仲間を増やしてあげよう」と、本物の石を拾ってきて、作品の周囲に置いて撮影する生徒や、迫力を出すためにタブレット端末を地面すれすれまで近づけて、下から撮影する生徒もいた。構図やアングルなどに、生徒一人一人の工夫があらわれている。

最終の第9時では、生徒たちの作品とモデルとした「石先輩」を隣どうしに机に並べ、鑑賞会を実施。先生は生徒たちに、「石の存在感が伝わってくる」と思わせる3点を選ばせ、感想を交流させた。

最後に、授業の総まとめとして、振り返りのワークシートに記入。制作を通して、自分が選んだ「石先輩」からどんな「石人生」を感じ取ったのか、振り返った。



上／本物の石を拾ってきて、自分の作品の隣に置いて撮影する生徒。
下／構図やアングルにこだわりながら、タブレット端末で記念撮影に取り組む。

〈生徒の感想〉

- 表面は、すべすべしているところもあれば、ごつごつしているところもあった。楽しいこともあれば、傷つくようなこともあったのだと思う。
- 表現できないほど細かい傷がたくさんあった。いろいろなところにぶつかってきたんだと思った。

生徒たちは、制作を通して「石先輩」と深い対話を続けたことで、自然物のもつ重みや価値を再発見できたようだ。「この子は～」と、愛情を込めて作品を自慢する生徒たちの姿が印象的だった。

どうすれば、 「石先輩」に 近づけるだろう？



Hさん

ハート形・黄色の「先輩」
×
スポンジでなじませる



筆で重ね塗りしていると、絵の具がはげて白くなり過ぎてしまった。そこで、色を塗ってから、その上をスポンジでたたいてなじませていくと、微妙な色加減が出せた。



本物の石

作品

複雑で細かい穴がたくさんあったため、指で触って穴の深さを確かめてから、つまようじと綿棒を使い、質感を表現した。

わたしの1枚



地面に置いた作品を斜め上から撮影し、陰影のある1枚に。



S君

三角形・茶色の「先輩」
×
濃い色から順に塗る



「色の魔法陣」を見ながら、混色により茶色をつくる。最初に濃い色を塗ってから、徐々に薄い色を塗り重ねていくことで、「石先輩」の複雑な色に近づけた。



本物の石

作品

石らしい表面の質感をあらわすために、平らな部分はへらを使ってならし、ザラザラしている部分はブラシでこすった。

わたしの1枚



苔のむす木の根元に作品を置き、タブレット端末を地面に近づけて撮影。迫力ある構図に仕上げた。



Kさん

四角形・黒色の「先輩」
×
筆を逆さにして引っかく



よく見ると、石の表面に無数の傷がついているのがわかったKさん。筆を逆さに使って引っかくことで、細かい傷やひびを表現した。



本物の石

作品

指に絵の具を塗ってから、たたくようにして着色した。表面の無数の傷からは、「これまでの努力を感じました」。

わたしの1枚



敷き詰められた落ち葉に作品を寝かせ、真上から撮影した。

これが私の「石先輩」／



T君 石がとても複雑な形をしていたので、川や海で流されたり、転がったりして、大変だったのかもしれないと感じました。白っぽい部分は、絵の具を手やブラシでこすり取って、あらわしました。

Oさん 石の表面に、人間でいう「しわ」のような傷がたくさん刻まれていて、何事にも動じず、めげずに生きてきたのだらうと思いました。木の板やブラシを使って、表面の凹凸を表現しました。



F君 この石は、いろいろなことを経験してきていると感じました。表面に紫色を塗った上から、薄めた黄土色を塗り重ねると、本物に近い色味になりました。



授業を終えて 「再現」から「表現」へ

本題材に取り組み始めた当初から、生徒たちが色を主体的に扱えるよう、混色や水加減、濁色に価値を見いだす仕掛けとして、色に関する題材を前後に取り入れ、「学びの積み重ね」が実感できるカリキュラムを組んできました。今も、それは意識しています。

ただ、どこか技能面に偏ってしまふところがあり、「表現」よりも「再現」をさせている感覚がありました。それが、ある研究会で、本題材に取り組んだ先生が「一握りの石が実は……」という導入をしたと聞き、「この一言のおかげで、生徒は対象へ思いをはせ、再現活動から表現活動にシフトできるのだらうな」と目からうろこが落ちた思いでした。

この導入を取り入れてから、生徒は自分で選んだ石を大切にするようになりました。友達が手を滑らせて石を落とすと「おい、先輩を大事にしろよ」と言い、机が傷つかないように画用紙で作った座布団シートを配ると、大切そうにその上へ石をそっと置くのです。

この授業をきっかけに、身の回りの自然をただ眺めるだけでなく、何かの拍子にその存在に気づき、自分なりに自然を感じ取れるようになってくれたらと願います。

宜昌大
そん・ちゃん

大阪府生まれ。摂津市立第三中学校教諭。京都精華大学芸術学部造形学科卒業後、家具職人。摂津市内の公立中学校教諭を経て、2012年4月より現職。



授業を参観して
これまで数多くの授業を見てこられた飯田真人先生に、
今回の授業を参観していただきました。



飯田真人
いいだ・まさ

京都府生まれ。桃山学院教育大学准教授。京都市立芸術大学大学院修了。高等学校教諭を経て、2013年より京都府総合教育センター研究主事兼指導主事。16年よりブール学院大学准教授、18年より現職。

生活の中の 美術に関わる

授業が始まる前から予感していました。教室に入ってくる生徒がとも「いい顔」をしているのです。

美術の授業は、学習指導要領は当然のこととして、地域の特性や学校の特色などを踏まえて計画します。ただ、題材の設定や指導計画はほとんど先生に委ねられているので、先生の美術に対する思いや願い、見方や考え方が授業にあらわれます。

そこで気をつけなければならないのが、先生自身の創作意欲が先行し、先生がつくりたいことをやらせる授業になってしまうことです。このような授業は、ある意味で目標が明確なので指導も行き届き、指示通りやれば、誰しもが見栄えの良い作品を仕上げられます。しかし、それだけに終わってしまいがちです。

授業で大切なことは、生徒が形や色彩、イメージなどを手掛かりに、ものとさまざまな関わりをもちながら創造を広げていくことです。

まず、宣先生は生徒たちに、対象物である石と向き合ってもらってから始めました。石に何千年何万年もの歩みがあることから「先輩」と呼びかけ、生徒は台紙を座布団として「先輩」に失礼がないよう座ってもらいました。この「先輩」という一言で、生徒たちはすっかり石の虜となり、関わりが始まったのです。

宣先生は、授業のはじめに技能としてではなく、「先輩(石)」と関わりを深めるための手立てを丁寧に伝え、「今日はこんな関わりをしていこう」と創作意欲を高めました。

授業では、生徒のさまざまな「先輩」との関わりを見ることができました。右手で「先輩」に触れながら、左手で同じように作品に触れ、目だけでなく指先を通して形を感じ取っている生徒、着彩した後にスポンジでこすってみる生徒、へらで表面を引っかく生徒——。つくり、つくりかえ、つくることを繰り返しながら、石との関わりを深めていったのです。生徒の中で「共通事項」をもとに、知識・技能、発想や構想、鑑賞の力が相互に働いているのがわかりました。

これは、本題材の前に取り組んだ「色の魔法陣(色相環)」などで混色の面白さを体感していたり、教室内にさまざまな道具や素材が置かれ、生徒が自由に使うことができたことなど、題材のつながりや学習環境の工夫がなされているからこそできることなのでしょう。先生の真摯な思いが生徒に伝わり、授業マナーにも自然とあらわれていました。

こうした積み重ねが、「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる」ことにつながると考えます。宣先生と関わった生徒たちの未来が楽しみでなりません。

表 存 自
現 在 然
す 感 物
る を の



← 宣先生の美術室の工夫は、こちらからご覧いただけます。